



2024年度（令和6年度）

「第3回 不登校を考える学習会」を行いました。

2025.1.30（木）

小郡市人権教育啓発センター

演題： 「子どもに寄り添うということ」
～発達障害のある子どもに学ぶ（2）～

本年度最後となる、第3回の不登校を考える学習会を1月30日（木）人権教育啓発センターにおいて開催しました。

今回の講師は、第2回の学習会でお招きした日野久美子さん（西九州大学 子ども学部 子ども学科 特任教授）です。これまでの学習会の歴史においてはじめて連続講師をお願いすることになりました。今回の学習会は、「子どもに寄り添うということ ～発達障害のある子どもに学ぶ（2）～」というテーマで、第2回の内容を振り返りながら、新たな内容を合わせてご講話していただきました。「話すこと」を中心とした子どもとの関わりや支援についてお話していただきました。今回の学習会には23名の方にご参加いただきました。学習会の内容についてご紹介します。



○ ゴールは「社会で自立すること」

日野さんからはまず、子どもに寄り添うという視点で、「発達障害の特性について」や「特性を理解した関わり方・寄り添い方」に関するお話がありました。自己理解と自己対応を合わせ高めていくことで、自分の能力を活用して社会活動に参加できる、適応できる力を育てていくことの大切さを教えてくださいました。障害や困難を抱える当事者が、自分の権利や欲求、利益、意思を自ら積極的に主張する



「セルフ アドボカシー（自己権利擁護）」を獲得するために、学校や家庭、地域でのサポートが非常に有効であることをわかりやすく説明していただきま

した。また、発達障害にも様々なタイプ、症状があり、その特性を理解することが、一人ひとりの支援に欠かせないことを教えていただきました。さらに、子どもの困り感の問題や、コミュニケーション力を高める「ソーシャルスキルトレーニング」の理論と方法について、日野さんの経験に基づいた貴重なお話をしていただきました。参加者のアンケートからは、「学校に行くことが目標ではなく、社会で自立できる大人になることがゴールということ胸に、子育てをがんばっていこうと思いました。」「子どものもどかしい気持ちがよくわかって、これからの子どもへの対応に生かれます。」といったご感想をいただきました。

○ グループワーク（演習）を経験して…

学習会の中では、4人一組でのグループワーク（演習）がありました。思いついたものを話す人、聞く人、励ます人などの役割を通して、自身がもどかしさを経験することで、子どものどうしていいかわからない状態を追体験できるワークとなりました。体験することでわかることや気づいたことがたくさんあり、「演習がとてもよかったです。学校での子どもたちの顔が思い浮かびました。」



といった参加者の声が聞かれました。最後に、ことばかけの見直し「か・き・く・け・こ」をみんなで声を合わせて読みあい、内容を再確認して第3回の学習会を閉会しました。

参加者アンケートより

- ていねいに説明していただきわかりやすかったです。自分の子育て時代を反省しています。体験することの大切さを再認識しました。
- 子どもたちの感じているモヤモヤや、「こうしたらできる」など、まわりの大人が気づくことが大切だと、改めて感じました。
- 前回は参加したのですが、演習がすごく参考になります。やはり、実体験って大事なと思います。
- 発達障害を通して、不登校の子どもたちのことを考えることができました。今後の家庭での過ごし方や学校での対応に役立てていきたいです。
- 演習もとても楽しく参加させて頂きました。子どもに寄りそうことが少しでもできるようにことばかけの見直しの「か・き・く・け・こ」を読み上げた時に、日々の子どもに接する自分の様子が見えてはっとしました。

